

〔第28回学術集会 特別講演〕

## 新たな感染症の時代の看取りと悲嘆

上智大学グリーンケア研究所所長

島 蘭 進

### I. さよならのない別れ

新型コロナウイルス感染症の流行時には、死にゆくプロセスと死者との別れが寂しいものに、ときには悲惨なものになる例が多数発生した。『見捨てられた母…米死者「命の格差」高齢者施設に集中』という朝日新聞の2020年6月の記事を見てみよう。ニュージャージー州アンドーバーの介護施設に住んでいた母のリリーさん（当時84歳）を3月23日に見送った、リー・レパシュさん（55歳）は「母は見捨てられた」と声を震わせたという<sup>i</sup>。

3月中旬から家族も施設内に入れなくなった。だが、職員は「感染者は出ていない」と答えるばかり。心配を募らせた姉が建物に近づき、1階の窓から部屋の中を見ると、母は痩せこけ、テーブルの上で突っ伏したままだった。2日後、容体が悪化したとの連絡を受け、間もなく息を引き取った。この施設は約700床と州内でも最大級。職員の多くは、マスクや手袋を支給されていなかった。地元警察が通報を受けて立ち入ると、4人を収容する遺体安置所に17人の遺体が放置されていた。6月上旬までに入居者78人、職員2人が亡くなった。

これほどではないにしても、類似の厳しい事態は日本でもいくつも発生した。2021年の4月から5月にかけて、神戸市の高齢者施設では、133人が集団感染し、このうち25人が亡くなった。同時期、大阪府でも門真市の有料老人ホームで61人の集団感染が発生し、13人が死亡するなど高齢者施設でのクラスター発生が相次ぎ、1ヶ月で49件に及んだという<sup>ii</sup>。

このような状況のもとでは、看取りもまともにできず、死に際に立ち会うこともできず、さらに葬儀もまともに行えないことが多かった。遺体との対面すらできないことも生じた。「さよならのない別れ」は死別の悲しみをさらに寂しいものにした。近親が亡くなったことを知り合いに伝えることさえ、しにくかったという人もいる。遺族にとっては、死者との別れを心の深いところで胸に納めていく過程、フロイトが「喪の仕事」とよんだ内面の過程が容易でない例も少なくなかったことだろう。

### II. 高齢者、貧困層、マイノリティ

中国の武漢から始まった新型コロナウイルス感染症の流行だが、その後、東アジア諸国は死亡者数が比較的少なく抑えられているのに対して、欧米諸国やブラジル、インドなどでは感染者数、死亡者数ともかなり多くなっている。どこの地域でも高齢者や基礎疾患のある人々が死亡する傾向が高いことは度々報道されている。だが、東アジアではあまり注目されないが、欧米ではしばしば報道されているのは、貧困層に死者が多く、人種やエスニティーで少数派の人々の死者数が多いということだ。米国、イギリス、スウェーデン、ブラジルなどで、アフリカ系、アラブ系、アジア系などの非白人に死亡者が多いことが報告されている。経済的基盤の弱い人々、差別的な処遇を受けがちな人々が、感染症の被害を受けやすく、あるいは感染症からの回復のための措置を受けにくい傾向があるとされる。

植民地主義から現代のグローバル経済に至る道は切り開いて来たのは、英米のアングロサクソン文明である。ところが、民主主義のお手本とも見なされてきたその英国と米国で、新型コロナウイルス感染症は猛威をふるい、両国は人口当たりで多数の死者を出した国々のリストの上位に位置している。そして、この両国で差別と格差に由来する国の分断と混乱は、深刻さを深めている。1980年代に新自由主義に舵を切り、グローバル経済を牽引してきた両国で、福祉や医療が届かず死んでいく人々が多数出た。

市場経済にできるだけ多くを委ね規制をしない。医療や福祉にできるだけ公費を投入しないなどが基本的な理念である。日本も中曽根首相の時代からその傾向を強めており、小泉首相や安倍首相の時代にそれが徹底されていった。医療崩壊が起こり、医療従事者が不足しがちで、その補充にとまどった背後には、国庫負担を軽減するために医療支出を節約しようとして進めてきた施策の影響が大きかったことも指摘されている。急速な感染症の拡大に対応するためには、平常の医療にある種のゆとりがなくてはならないのだが、数値の上でのゆとりが実質的なゆとりにはなっていなかったことが露わになったとも言える。

### III. ホセ・ムヒカの洞察

ウルグアイの元大統領、ホセ・ムヒカは2020年6月のインタビュー記事『「人生は富を築くだけのものなのか」“世界一貧しい”元大統領がコロナ禍で問う価値観』で、以下のように述べている<sup>iii</sup>。「コロナ危機で最も影響を受けるのは、中間層の下層に位置する人たちだ。彼らは貧困層に転落して生活が苦しくなり、貧困人口全体が増えるとみられている。近い将来、格差是正を求めたフランスの反政府デモの象徴「黄色いベスト」を着け、声を上げる動きが各国で強まるだろう」。

また、以下のようにも述べている。「中南米各国は世界的に見ても貧富の格差が激しい。しかし、コ

ロナ禍を機に貧困層を中心に強い連帯感が芽生え、助け合いの精神が広がった。その日の食事に困らないよう炊き出しや食料配給などの取り組みが貧困層の中で自発的に行われている。(理由の一つは)コロナ禍で自宅にいたことが増え、今まであまり考えなかったことを考える時間が増えたからだ。自分は幸せなのか、人生や運命とは何か、と自らを見つめ直す時間だ。以前は仕事や睡眠に時間を費やし、自分の存在意義について振り返る余裕はあまりなかった人が多いだろう。思索を通じ、個人が社会や集団での役割を認識し直し始めている。」

このインタビューが行われたときには、ブラック・ライブズ・マター (Black Lives Matter) の悲しみと怒りのデモが世界に広がる前の段階だったはずだ。この声は、「弱い立場のいのちを見捨てるな」というコロナ禍の中から湧き上がってきた声とも重なり合っている。こうしたときこそ、政府が「いのちを守る」立場で力強い政策を打ち出すべきときである。人口わずか350万ほどの国の格差是正に努めてきた元大統領の発言が、世界の未来を照らすように感じられる時代となっている。東アジアは先頭を走っているつもりで、実は大きく遅れをとっていたのかもしれない。2021年春から夏にかけては、今度はアジアの新型コロナウイルス感染症被害の増大が目立つようになりもした。

### IV. 分断を超えていく働き

多くの人が苦難に襲われるような事態で、人々の間で分断が生じることは少なくない。戦後の日本において、強く記憶に刻まれている事例として水俣病の被害を思い起こしてみたい<sup>iv, v</sup>。水俣病はチッソ水俣工場が排出していた有機水銀による中毒が原因で、まずは漁民に深刻な症状が現れ、死者も相次いだ。1950年代のことである。だが、当初、その原因はよく分からなかったため、伝染病かと疑う人も多かった。そのためもあって患者やその家族は接触を避けられ、ときには村八分のような差別を受ける

ことも少なくなかった。

やがてチッソの会社に責めがある工場廃液が原因であることがわかって来ると、チッソの責任を問う漁民、患者やその家族、支援者たちと、生活を支える収入のもとである会社を守ろうとする人々の間で対立が深まっていく。さらに、チッソの労働者の間でも会社の責任を求める側と会社側につく側との対立が起こる。政府、熊本県、経済界はチッソ側について、会社の責任をなかなか認めようとしなかった。有機水銀が原因であることを認めない立場に固執して政府側に立つ科学者もいて、政府やチッソを守ろうとした。こうした事態が長く続くことにより、患者側の苦難は深まり、長引いた。

政府とチッソがその責任をようやく認めたのは、1960年代も遅くなってからであったが、その後も損害賠償の範囲を狭くしようとする政府や会社側と患者側の対立は続いた。こうして、水俣の住民の間の差別と分断は数十年にも及んだのだった。こうした過程を経て、差別と分断からの脱却のための動きがようやく形をとるようになったのは1994年、吉井正澄水俣市長がこれまでの行政側の責任を認め、死者と遺族、患者と家族らに謝罪を行い、和解への道を提起したことがきっかけとなっている。これを「もやい直し」という。「もやい」とは船をつなぐなわのことであり、つながりを回復することを象徴する用語として用いたものである。今では政府のホームページにも「もやい直し」について記されている。

この「もやい直し」を導いた患者や遺族・家族・支援者らの集いのなかに、訴訟による闘いではない側面から問題を捉え直そうとした人々がいた。その人々は1994年に「本願の会」という会を作り、祈りの次元を含んだ発信を行なっていくことになった。「本願の会」は人間同士の対立を超えて、生き物や環境にまで及ぶ人間全体の責任を問う姿勢もっていた。それとともに、死者や自然とともに生きることの意義を訴えようとした。杉本栄子、緒方正人らの人々だが<sup>vi</sup>『苦海浄土』の著者である作家の石牟礼道子も彼らとともに分断を超えて、悲しみ

をともにする歩みを後押ししたのであった。

## V. 対人援助やサービスに関わる仕事の見直し

新型コロナウイルス感染症ではさまざまな分断が生じている。特定の人々に苦難が偏ることも、ともに協力し合う姿勢をとりにくくしている。職業では、介護・教育・保育も大きな負担を負うことになった。介護施設で新型コロナ感染症が出た場合、悲劇的な事態に追い込まれる。治療できずに最期まで看取らなくてはならない人がある。医師や看護師が見放してしまう人を介護者がケアし続けなくてはならない例も出てくる。

教育や保育の現場では、距離（ソーシャル・ディスタンス）をとりたくてもとれないような状況で、長時間にわたる仕事を続けなくてはならない場合も出る。いったん複数の感染者が出た場合、そうした現場は過剰な労働に輪をかけるようなことにもなり、閉鎖に追い込まれるようなことも生じかねない。

他方、ホテルや飲食業、理髪・美容、エンタテインメントに関わる仕事、また顧客接遇の仕事に携わる人たちは経済的な苦境に追い込まれたり、リスクを負った過酷な作業に多くの時間を費やすこととなる。消毒や清掃や換気など、これまで以上に多くの負担を負わざるをえない場合も少なくない。

これら対人援助やサービスに関わる仕事から人間同士の身体接触・接近を減らそうとする動きは、今後ますます強まるだろう。ICTやロボットによって、対人援助やサービスが身体的な接触・接近を介さずにできるような方向へと進むだろう。しかしそれがどこまでも進むのか。それによって感染症の危険を抑えることが可能になるのは確かだとしても、それが人間の苦悩の軽減や幸福の増進を保証するのだろうか。

ここで考えなくてはならないことは多い。新型コロナウイルス感染症蔓延時には自宅滞在（stay home）が強く唱えられたが、自宅にいることは多くの場合、家族とともにいることである。同居家族

のいない自宅待機は子供にはできないし、高齢者やからだが不自由な人、またその同居者には辛いことだ。自宅待機しつつ同居家族のいない単身者のなかには、心細い思いをした人は少なくないことだろう。子供とともに長期間自宅待機するのが容易でなかった人たちも多い。

## VI. ケアと共苦共感を育む社会へ

今世紀に入り、「無縁社会」と言われるように孤立する人が増えていく現代社会の動きを踏まえ、「ともにいる場」の構築が求められていた。パンデミックのもとで「家庭」にかわる「ともにいる場」の意義がさらに強く認識されるようになっていく。感染症対策でICTやロボットを活用する方向に向かうのはよいが、これまで以上に「ともにいる場」が得にくくなることが懸念される。

ここで思い起こされるのは、近年「ケア」への関心が強まっていることだ。2020年にはロンドンを拠点とするケア・コレクティブというグループにより『ケア宣言——相互依存の政治へ』という書物が刊行され、2021年には日本語訳書も刊行された。宗教に近いところでスピリチュアルケア、グリーフケアが関心を集めているのもそれと関わっている<sup>vi</sup>。宗教者も「寄り添う」ケアの姿勢を尊ぶ傾向が見られる。ところが、新型コロナウイルス感染症により、ケアを求めざるをえない人々もケアに携わる人々も、いくつかの意味でたいへんつらい立場に置かれることになった。だが、この困難を通してケアの仕事やケアの場の重要性は、これまで同様、あるいはこれまでもまして認識されていくだろう。

ケアの活動では、「いのちを守り育む」働きをもつものが大きな要素をなしている。パンデミックは一方で、こうしたケアの意義が高く評価される機会ともなった。死に脅かされる状況では、危機にさらされた目の前のいのちを助ける共苦共感の心（コンパッション）の大切さが痛切に認識される。感染拡大の危機的局面では、ケアの仕事の報われなさが痛

切に感じられる。だが、同時にケアの仕事の意義深さの認識も深まっていると考えたい。もの足りないものの政府が報酬面待遇面での改善に取り掛かったのもその認識を反映している。

## VII. 宗教とスピリチュアリティの役割

ケアと共苦共感を育むということでは、これまでの人類社会では宗教が大きな役割を果たしてきた。歴史上、宗教は差別を増幅することも、差別される人、身寄りがなく孤立していく人を守り支える働きをすることもあった。感染症に苦しむ人たちが差別と排除に苦しむ時代は長かった。排除されるハンセン病の人たちを進んで助ける宗教者はキリスト教の歴史にも日本の仏教の歴史にも見られる。

身近な人との死別の悲嘆、感染症の打撃を受ける恐れ、暮らしの先が見えない苦難に苦しむ人が多い、まさにそのときにケアがしにくい。こうした困難のなかから、ケアと共感の精神をどう伝え育てていくのか。宗教伝統、宗教団体だけではない。人々の間に受け伝えられてきたケアの心、共苦共感の「心の習慣」がどう引き継がれていくのか、これは文化のなかの宗教性、スピリチュアリティの問題でもある。

弔いという側面からもケアという側面からも、「排除しない」「見捨てることがない」心のあり方が求められていることも確かだ。水俣の人々が苦難の中から生み出した、悲嘆をともにし、分断を超えて、和解へと向かっていった歩みを思い起こしたい。ホセ・ムヒカが示唆しているように、格差がもっと小さく人を孤立させない社会、共苦共感のケアが重視される社会を求める声とともに、広い意味での宗教の役割も再認識されていくだろう。

## 文 献

- <sup>i</sup> 朝日新聞：見捨てられた母…米死者「命の格差」高齢者施設に集中、2020年6月8日
- <sup>ii</sup> テレ朝ニュース：25人が死亡した高齢者施設 現場医師が語る実態、2021年5月9日
- <sup>iii</sup> 毎日新聞：「人生は富を築くだけのものなのか」“世界一貧

- しい”元大統領がコロナ禍で問う価値観, 2020年6月2日
- <sup>iv</sup> 色川大吉編: 新編 水俣の啓示—不知火海総合調査報告, 筑摩書房, 東京, 1995
- <sup>v</sup> 栗原 彬: 証言 水俣病, 岩波書店, 東京, 2000
- <sup>vi</sup> 島蘭 進: スピリチュアルケアと宗教, 鎌田東二編, 講座スピリチュアル学 第1巻スピリチュアルケア, ビイング・ネット・プレス, 神奈川, 2014
- <sup>vii</sup> 島蘭 進: ともに悲嘆を生きる—グリーフケアの歴史と文化, 朝日新聞出版, 東京, 2019